野村生涯教育だより

No. 430

発行所
公益財団法人 野村生涯教育センター
東京都渋谷区代々木 1-47-13 〒151-0053
TEL 03-3320-1861　FAX 03-3320-0360
URL www.nomuracenter.or.jp

(公財) 野村生涯教育センターの
シンボルマーク
[n] は、名称「Nomura」と、
基本理念「自然観 = Nature」の
頭文字を表している。

もくじ

● 公益財団法人第 9 回設立記念式
財団法人設立 40 周年記念
● 令和 3 年度　野村生涯教育講座開講
● 幼児教育部　第 44 期修了式

新緑の公園

公益財団法人 第九回設立記念式 財団法人設立四十周年記念

四月一日（木）、当センターは公益財団法人へ移行して九回目、そして一九八一年の財団法人設立からは四十周年となる記念日を迎え、当センター第二研修会館を主会場に、全国二十六会場をオンラインで繋ぎ、都内在住の評議員二名のご臨席の下、記念式を執り行った。

今年一月、二度目の緊急事態宣言が発せられたこと、また医療提供体制のひっ迫等社会的な状況を踏まえ、当センターは、一月、二月の全国講座生勉強会を延期、そして三月四日の創立五十九周年記念式と勉強会もやむなく中止とした。そうしたなか金子由美子理事長は、この財団法人設立四十周年という節目の記念日を、オンラインで繋げば全国講座生のみならず、各支部・連絡所で学ぶ地域のメンバーも共に祝えるのではないかとの願いを持った。例年であれば各支部・連絡所ごとに行われていた記念日のお祝いは、この度オンラインで〝一堂に会する〟形で実現する運びとなった。

当日は、昨年十二月以来ほぼ四か月ぶりの再会に各地のメンバーは喜びもひとしおで、祝意にあふれた一日となった。

はじめに、木村英世理事が挨拶に立ち、令和三年を迎えてからの三カ月をふり返った。そして「創設者は、野村生涯教育原論に『波風に大海の表面がいかに荒れ狂っていても、深海には静寂そのものの世界が横たわるように、いかに世相に流れる新しい情報や価値観が奇をてらっても、不易の価値は時代と共に、世相の移り変わりと共に変わることなく、常に新しい価値として不滅であります』と述べられています。今、大海に大嵐が吹き荒れるがごとくに、さまざまな問題に直面しています。しかし、創設者はこの学びを生み出され、その教育原理と理想を高く標榜する組織体を私たちに遺してくださいました。そして受け継がれた金子理事長は、この社会は自然につくられたものではなく、私たちがつくったものである。ならば教育原理に則り自分自身を知り、今の社会から自分の課題を見出し、自己教育を通して相互教育を図り、身に行うこと、と指導くださっています。

暗黒の大海原に羅針盤を得るが如く道理をいただき、深海に横たわる静寂な世界があることを教えていただいている。そのことに心底からの感謝を込め、この記念日の挨拶とさせていただきます」と語った。

続いて、財団法人設立となった一九八一年の創設者 野村佳子初代理事長による『財団設立にあたって』、そして四年後の八五年四月一日に、故吉成知加子専務理事が認可までの八年をふり返った『財団法人設立の経緯について』の録音を、七〇年代から八〇年代当時のお二方をはじめとする諸先輩の写真スライド上映と共に拝聴した。

午後からは全国各拠点に参集したさまざまな年代の出席者から、お祝いや感謝の言葉が述べられた。

群馬・九十代女性「思い起こすと、四十年前でございますので、私も五十代でしたが、財団法人認可の下りた日に、埼玉県嵐山の会場で全国講座を受けておりました。そのときに満場の拍手と感激をもってその知らせを伺ったことが忘れられません。年齢とともに体も不自由になりますけれども、命ある限り大勢の人たちに、そして、子どもたちにこの学びの精神を伝承していくことを誓います」

福島・八十代女性「このコロナ禍、世界中に貧富の差が拡がり、また、人種差別などが酷くなっています。私たちは、価値観の転換に努め、自分のことばかり考えずに世界のことを考えていきたいと思います」

そして一日の締め括りに金子理事長が挨拶に立った。

「三月四日の創立記念日は、二年連続で中止となり、来年六十周年を迎える厳しさを感じております。そして今日を迎えるにあたり、当時の機関紙等から学んだのは、創立することの厳しさ、また、写真を皆さんと共に見せていただきながら録音でお話を拝聴し、改めて一九八一年当時、生涯教育の概念がまだ一般的ではない中で財団法人認可を得ることの厳しさを感じました。機関紙十六号に『草創期からの歩みに母性を必要としたように、法人の認可を得、社会に公の立場を持ったセンターが活動をしていく上で必要とするのは、厳しさ、逞しさ、責任の大きさ、そうした父性の持つ厳しさである』と記されています。このことを噛みしめると、コロナ禍から公の立場を持つことの意味を問われているのではないかと思います。

今、一昨年まで当たり前に行ってきたことが当たり前にはできなくなっています。当センターでは全国講座生が毎月東京に集まること、各支部・連絡所でも講座や読書会で地域ごとに集まること、その一つひとつが当たり前にはできないという事実が突きつけられています。どうしたら皆で集まり、講座ができるのか、知恵を絞りそれぞれが考え、全国講座で言えばオンラインでの講座開催に至っているわけです。

しかし、私たちは一つのことができると、それが経験値になり、直ぐにマニュアル化してしまいがちです。社会は常に動き変化しています。新型ウイルスについてもワクチンが開発されましたが、それが具体的に人々に行き渡る前に、そのワクチンの有効性が不明な変異株が現れるという速さで変化しています。世界レベル、国単位でもマニュアル化の中で滞っていくもの、また、小さなミスが重大ミスに繋がるようなことが多く起こっているのではないでしょうか。

近々では、情報流出の問題や行政レベルでの法案ミス、文言の誤り等が報道されました。ＰＣ上の変換ミスが多いとのことで、日常私たちにもよくあることですが、しかし、ケアレスミスに止まらず、重大な、国同士の問題に繋がるような間違いもあったとのことです。

こうした社会の中のミスもさることながら、当センターでも昨年、ミスがありました。ひとつにはこのコロナ禍で事務局運営が縮小されていることの影響もありました。しかし担当部署がミスに気づくのが遅れたことを含め、組織の長としての私のお詫びを、皆さんはとても温かい思いと言葉で受け止めてくださいました。そのお気持ちに、むしろ私は、改めて私の責任を痛感しました。

創設者は高度経済成長期にこの活動を始め、経済価値優先のさなかに、私たちを本質的気づきへ導き、物・金の価値から人間そのもの、生命の価値への転換を図ることをめざしました。そして物心共のボランティア精神の掘り起こしのために寄金を募り、法規を苦手とする家庭婦人が国に法人申請し、八年もの歳月をかけて書類づくり、資金づくりをした結果、社会的立場である財団認可を得るに至りました。諸先輩方がこうした経緯を経ながら次世代に関わり、そして関わっていただいた世代の意識が徐々に変化し、本当に大事なものと

は何かに目覚めるなかで、足もとの家庭が調っていくという実証を得てきたのだと思います。

物・金や、目に見える成果、結果が主流の現代社会にあって、本当に大事な価値に気づいていくこと、その意識が変化し、一人ひとりが変化する、そうすれば社会が少しずつ変化していくはずです。

自分たちの住む社会が悪くなったなら、まずその責任を自分に見、自らの課題としていく。そして、活動を通して物心共のボランティア精神を引き出していく。今日という日が歴史をふり返る機会となり、その

精神を継承し公益財団法人に移行できた上での四十周年を、皆さんとお祝いできますことを心から感謝します」

現代社会にあって、公に資する責任の厳しさ、誠実であることの大事さが示され、一人ひとりがそうした人間性を培うことを期する記念日となった。

以下参加者から寄せられた感想を掲載する。

千葉・五十代女性「初めて参加し、オンラインで全国二十七カ所が繋がりすごいと思った。理事長の挨拶で物・金に制せられない自分をつくっていくことの話を伺い、新年度のスタートが切れて良かった」

山梨・四十代女性「オンラインで全国が繋がった中で、お話と共に初めて当時のお写真を拝見し、嬉しかった。また当時を知る大先輩の生のお声を聞き、感動した。草創期の先輩方のご苦労があり、私の両親が学んでくれていたから私も学ぶことができ、息子も三月に幼児教育部を修了した。繋がりの中で今があることを思い、感謝になった」

茨城・四十代女性「初めて式典に参加し、センターの精神に感動した。録音で財団設立の経緯を伺い、先輩方の生涯教育への思いの強さを感じた。また、創設者の声を聴き、その場に創設者がいらっしゃるように感じた」

千葉・四十代女性「創設者はじめ草創期の先輩方の人さまを思う気持ちを感じ、私もそういう人になりたいと思った。また、センターの財源はすべて会費と寄付で賄われていることがどれだけ貴重なことかと改めて思い、センターに縁をいただいていることを誇りに思った」

埼玉・三十代女性「財団法人の認可を得る経緯を伺い、活動への誇りや使命感、湧き上がるような熱意を感じた。私も物・金に価値を置いていたが、学んで心の価値の大事さを感じられるようになったので、もっと使命感をもって次世代にその価値を繋げていきたい」

広島・二十代女性「仕事が休みになり式典に参加できた。ご高齢の方々が情熱をもって次々と発言されていることに感動し、参加して人生観が変わった」

東京・五十代男性「理事長が、部署のミスをご自身の責任としてお詫びされたことに触れていたが、今、社会の至るところで、責任を取りたくない、非を認められないというような対応を多く見受けるだけに、公に資する責任の厳しさ、一つひとつを誠実に対応することの大事さを感じ、そうした人間性を培うことを課題としたいと思った」

令和 3 年度　野村生涯教育講座開講

開 講 の 願 い

公益財団法人野村生涯教育センターは、今年度、創立 60 周年を迎えます。

令和 3 年の幕開けにあたり、金子由美子理事長は年頭の挨拶で「今世紀を生きる私たち人間にとって大前提にしなければならないことは、＜自分たちがどういう時代を生きているか＞の認識を持つ重要さと、この自分の生きる時代の認識の上に立って＜自己とは何か＞を知る自己認識の重要さ」を述べました。

今、私たち人類は気候変動における分岐点に立ち、地震活動が活発化する中、福島第一原発の廃炉や汚染水の処理の問題を抱えています。さらに、新型コロナウイルスによって、人類の私たち一人ひとりは命の危険に晒されています。足下では、超高齢社会の問題、8050 問題、急速なデジタル化の中での格差社会、青少年の問題、幼い子どもを抱える親たちの不安、悩み、そして乳幼児が犠牲となる悲惨な事件等々。あらゆる世代が、それぞれに直面する厳しさの中で日々を送っています。

この危機的状況に対して、金子理事長は、私たちのこれまでの生き方、考え方のままでは、たとえ震災からの復興が成り、新型ウイルスのパンデミックが収束へ向かおうとも、再び同じ道を歩むことになるのではないかと警鐘を鳴らしています。

「社会は自然に作られたものではなく、私たちが作った社会、世界である」との金子理事長の言の下、自分自身を知り、今の社会を作った自分たちがどうあったらいいかの視点に立ち、自己教育を主軸とした相互教育を通し、少しでも明るい未来を次世代に繋ぐべく「未来創造学としての生涯教育―野村生涯教育論」を皆さまと共に学び合いたくご案内申し上げます。

令和三年度 野村生涯教育講座開講

四月、前掲の「開講の願い」の下、今年度の「野村生涯教育講座」が開講した。全国各支部・連絡所のリーダーを対象としたオンラインでの全国講座を皮切りに、東京・代々木で行う本部講座、また全国各地でそれぞれの地域の感染状況を踏まえて、最終的に三十カ所で開講した。

今号は全国講座と青少年学習講座の模様をお届けする。

全国講座は、昨年度、新型コロナウイルスの感染拡大の影響により東京に集まり講座を持つことが厳しい状況のなかで、初めて全国十五拠点を繋ぐオンライン形式で行った。年が明け、予断を許さない、さらに厳しい状況が続くなか、今年度は、年間を通して基本的にオンライン形式での開催を決めた。

また、昨年十二月の終講以降、オンラインであっても受講生が集い勉強会を持つことが叶わず、金子理事長はじめ本部は研修・地域担当を通して各支部・連絡所の責任者にそれぞれの地域の状況やメンバーの様子を聞いていた。そのなかで、東京でのリーダー研修に通うには至らないが、地域で真剣に学ぶメンバーが多くいることがわかった。せっかくオンラインで全国講座を行うのであれば、そうしたメンバーに、さらに深く学ぶ機会となれば、という金子理事長の思いを受け、地域の責任者が本人の意思を確認し、新受講生十五名、再受講生二名が加わった。

四月五日（月）、六日（火）、当センター第二研修会館を主会場に全国十八拠点を繋ぎ開講を迎え、二一七名が受講した。

初日午前中の運営会議では、金子理事長が挨拶に立ち、新型ウイルスの蔓延状況、変異株について触れ「非常に緊張感を持ち今日を迎えました。こうした条件を通して私たちの意識を改めて見つめていきたいと思います。そして〝意識と身体と環境は繋がっている〟という道理に基づいたものの見方、〝自然界に生かされて在る〟の意味合いを皆さんと深く学んでいきたいと思います」と述べた。

午後は、野村生涯教育論「第一章　生涯教育への道程」の前半の講義を、研修・地域担当の佐野美智代さんが行った。

佐野さんは「野村生涯教育の動機となった青少年の不幸の問題の要因として、創設者は『教育の欠落』と『大人社会の反映』を見いだされ、教育の抜本的問い直しと、大人社会の変革の取り組みをされてきた。公益財団法人第九回設立記念式で、金子理事長が、物・金や成果、結果が主流の現代社会の中で、私たちはこの学びによって価値観を変える方に向かわせていただき、それが公に資することだとおっしゃった。そしてその人間教育とは地道で根気のいる作業であるとのお話が心に残った。後日、理事にそのことを話すと『創設者は教育は伝達伝承の作業だとおっしゃいました。あなたはご両親から繋げていただいた自分の価値に気づいている?』と問われた。草創期から学ぶ母は、高度経済成長で物が豊かになる途上、多くの家庭で子どもの問題が起き、本当に大人の側が変わらなければと思ったこと、創設者から『今は土台を作っているのだから後世のために頑張りましょう』と言われ、『ああそうだ、そのためなら頑張れる』と、夜は家業の旅館の仕事をし、朝お客さんを送り出してから啓蒙活動に回ったことや、欲しいものがあっても買ったつもりの〝つもり貯金〟をし、夫婦で社会のために寄金することが喜びだったことを話してくれ、そうした両親から私自身がボランティア精神を受け渡されたことに気づいた。そのことに感謝し、私も自己変革を通して、次世代へ繋げていける人間になっていきたい」と語った。

二日目は、野村生涯教育論「第一章」の後半の講義を金子理事長が行った。

理事長は〝今、なぜ生涯教育か〟につい

て今日的意義を述べ、次のように語った。「開講の願いにあるように、世界的に病理現象を呈している現実は、現代教育がいかに大きな歪みを持つかを物語っています。

私たちを生かしている世界、この地球環境が危機に瀕し、新型ウイルスで私たち一人ひとりの命が危険にさらされている時代が要請する教育とは何か、を誰もが真剣に考えなければならないと思います。

この行き詰った危機的時代に、生涯教育の本質的な教育論を学ぶ私たちは、生涯教育の目的とするところを明確にし、実践していかなければならない。そしてそれを啓蒙していかなければならないことを強く思います」と述べた。

そして「私たちは機械文明の中で、機械に頼り依存する意識が強くなっているだけに、何の動機、目的で事を行うかを常に主体的に考える教育が必要だと思います。そうした人間教育の問題が、政治、経済、社会すべてに優先しなければならないことを思います」と語った。

〝教育の目的は何かの探究―生きた人間そのものを目的にする〟については、既成の教育観の転換の四つの要点を詳述した。

その後、〝現代教育に見る三つの欠落〟に触れ「人類の歴史と同じ永い過去の経験をすべて内在し、その制約を受けている人間は、肉体と精神との間に矛盾、撞着を持っていることを知らなければならない、と創設者は説いています。昨日の運営会議で、支部責任者の方が、草創期から学ばれたお母さまが先日亡くなられ、その徳を継承したい、と発言されていました。そのことで私の中に引き出されたのは、夫婦の問題、親子の問題、金銭の問題など、さまざまな葛藤を抱えた諸先輩方が、自身の中の矛盾と向き合い〝自然界に生かされて在る〟という道理に基づいた自分とを照らし合わせ、自己との熾烈な闘いをされたなかで、今私たちがこうして継承できるような礎を築いてくださったのだという思いです。

私自身、私にとって理事長を拝命したことは、とても厳しい条件ではありましたが、役を通して、父母、そしてその前のルーツから受け継いだ私の中に内在するものを引き出していただいてきたことを今実感しています。皆さんもこの学びを通して、触れ合う条件から、自己を知るチャンスをいただいているはずです。一人ひとりが自分に内在する価値や自身の尊厳に至ることが、今の危機を唯一、脱する道に繋がることだと私は信じています」と語った。

その後の全体会では、新受講生の発言が目立った。

岡山支部の男性（六十代）は「理事長の講義に、機械化の恩恵と共に人間性が失われ、経済主体の価値観になっているとのお話があった。私は三年前に定年退職し、妻と郷里の岡山へ戻るまでは東京で働き、どうしても経済主体の価値観だった。支部で学ぶようになり、それが今大きく変わりつつある。家族にさまざまな問題が起きたが、皆さんから関わりをいただいたおかげで、何とか乗り越えることができた。そのことから今まで一人で生きているような気でいたこと、人の言うことを聞かない自分にも気づかせてもらった。それを今後課題とし、より深く学んでいきたい」と発言した。

また、群馬支部の女性（四十代）は「四月一日の公益財団法人設立記念式には祖母と共に参加し、昨日は叔母の講義で、後世のためにこの活動をさせてもらえる喜びがあったと祖母の言葉を聞かせてもらった。私は現在、祖父母が始めた旅館業を手伝っており、コロナ禍での政府の対応やさまざまなことに矛盾を感じ、苦しい思いでいた。しかし理事長の講義を聞き、諸先輩方が後世のことまで思い、自己との闘いをされてきたなかで今自分も学べていると思うと、改めて祖母への感謝と、私も今の条件を通して自分と向き合い、学んでいきたいと思った」と発言した。

他にも、多くの会場から手が上がり、受

講生一人ひとりが、自己に内在する価値の掘り起こしを期した開講となった。

青少年学習講座は、四月十一日（日）、国立オリンピック記念青少年総合センターを会場に、十一名の参加で開講を迎えた。

同講座は学生・若手社会人を対象とした一泊二日の宿泊研修であるが、昨年は新型ウイルスの感染状況により、延期もしくは一日研修としてきた。今年度も状況を見ながら判断していくこととして、開講は一日の研修となった。

はじめに、新年度開講にあたり責任者の松永淳一さんが挨拶を述べた。続いて「公益財団法人 野村生涯教育センターのあゆみ」のビデオを上映した。

そして野村生涯教育論「第一章 生涯教育への道程」の講義が行われた。講師を務めた松永さんは「子どもの頃、人見知りの性格で人の中に入ることが苦手だった。高校生の頃、それを克服したいと思い、この青少年学習講座にも参加するようになり、先輩や仲間たちと触れ合うなかで克服できた。その後、働きながら本部青年部の副責任者をさせてもらうなかで、多くの関わりをいただき、人見知りの克服という目的から、人間は無限の可能性が本質としてあると学ぶように、その自分を知っていきたいと学ぶ動機が変わった。自分が先輩方からしてきてもらったように、皆と共に学び成長していきたい」と語った。

午後の討議では「開講の願い」を読み、そこからコロナ禍において学校や家族との生活のなかで感じることを話し合った。

「今まで人間関係で悩んできたが、なかなか人と会えない今、その悩みさえありがたいことだったと思った。大学では、重要な連絡もすべてインターネットで確認する必要があり、情報を追っていくことも大変だと感じている」「中学生で最後の部活の大会がリモートになり、それも中止となってしまったが割り切るしかない」「高校生活を楽しめと言われるが、おしゃべりするなとも言われ、矛盾を感じることが増えた」「コロナ禍の生活も段々慣れてきてしまい、それはおかしいと自分でも思う。でも、このように生で話せる場がありがたい。自分も人の悩みを聞いてあげたいと思う」といった気持ちが出され、共感したり、助言し合った。

仲間と集い直接話す機会が減り、悩みや気持ちを出すことが難しい今、こうして異なる世代の若者たちが触れ合い学べることの貴重さを確認した一日となった。

参加者の感想（抜粋）を紹介する。

Uさん・大学生　講義の中で、数値や評価では人間の価値ははかれないと学べたことが大きかった。また、今日の話し合いの中で主体性や自分の軸を持つことの話を聞き、今までの受動的な学生生活や人との接し方から、人に流されずに自分の感性や考え方を大事に誇りをもっていきたいと思った。

Hさん・高校生　話を聞いてもらい、自分のなかで溜まっていたものを出すことができた。〝コロナだから〟〝コロナのせいで〟と不満もある日常生活のなかで、こうして今回の講座に参加できありがたい。このような状況になったからこそ、当たり前にできていた環境のありがたさに気づくことができた。

Uさん・高校生　皆の話を聞いて、さまざまな社会の問題があるなかでも、年代や状況で人によって考えていることが違うのがわかった。

幼児教育部
第四十四期修了式

三月二十七日（土）、当センター幼児教育部第四十四期修了式が第二研修会館で行われた。

今期修了生は、生形紗理奈さん（東京）、外川東洋君（山梨）の二名。全国講座の幼児教育部に母親と参加していた山梨支部の東洋君は家族が話し合い、新型ウイルスの感染状況に鑑み、県を跨いでの参加を見送った。

開式にあたり、幼児教育部副責任者の十文字愛子さんが挨拶に立った。

そして金子由美子理事長から修了生に修了証書と記念品が手渡された。紗理奈さんが緊張しつつもしっかりと受け取ったのに続いて、東洋君に代わり昨年度修了生の十文字櫻さんが演台に進んだ。

引き続き理事長は『お祝いのことば』として「感染が収束しないなかで、東洋君が出席できないのは残念ですが、こうして修了式が持てることを嬉しくありがたいと思います。

今、人類は大きな岐路にあります。オリンピックは四年に一度、センターの創立記念日は毎年あって当たり前だったものが当たり前ではないことに気づかされ、どうしたらできるのか、あるいは、できないなかでも何ができるのかと知恵をしぼり、繋がる工夫をしています。

今年の『節分会』を幼児教育部の皆さんはオンラインで行いました。今まで通りにできないからこそ、自らの内にある可能性をまず親が引き出すことが大事で、そのことを通して子どもたちに生きる力を引き出す道筋をつけているのだと思います。本日も感染対策をしっかり取り、できる限りの努力をして迎えることができました。そして条件のせいにせず、諦めない精神を培い、できることは何かを見いだす心を育てています。そういった親の姿勢のなかで育つ子どもたちは逞しく生きる力を養えると信じています。

紗理奈さんのお父さん、東洋君のお母さんは幼児教育部を修了した大先輩です。それは、紗理奈さんのおばあちゃん、東洋君のおじいちゃん、おばあちゃんがセンターで学ばれていたからです。親子二代に亘って幼児教育部を修了することは、この学びを継承しているということです。このような繋がりも創設者がセンターという場をつくってくださり、いろいろな方々と触れ合い、ご縁をいただいたからあるのです。ですから今日も家族以外の方々が祝ってくださる環境をいただいているのです。この貴重な繋がりを絶やすことなく育んでいってもらいたいと思います。それには、まず大人から、人さまの思いを大事に思える人間になる。それは子どもたちが共に生きるお友だちとの輪を拡げていけることに繋がるはずです。

今の時代、ましてコロナ禍で孤立化が進んでいます。親から受け継いだ貴重な精神、自分と共に人のことを考えられる心をより一層大事にし、未来を生きる子どもたちを育んでいただきたいと思います」と語った。

次に副責任者の村岡智子さんが『送ることば』として修了生二人の思い出を語り、修了生がお礼を述べたのに続いて、紗理奈さんの父親は、自身が第五期の修了生であることに触れて「きっと創設者や亡き母はここで見てくれているだろうと思いました。幼児部を修了した娘たちが、将来また子どもとセンターで学び、代々繋がっていったら有り難いと思います」と感謝を述べた。

最後に羽田野麻衣子さんが終わりの言葉を述べ、芸術教育部で学んでいる幼児教育部の先輩たちのバイオリンの音色と参加者の拍手で修了生を見送った。

会場は、静岡支部幼児教育部から贈られた飾りにも彩られ、参列が叶わなかった多くのメンバーの思いもこもった修了式となった。